

乳幼児期から児童期における読み聞かせ頻度の変化と 保護者の持つ読み聞かせの効果への期待 —小学校に児童を通わせる保護者を対象とした実態調査—

Trajectory of joint book reading frequency from early childhood to childhood and
expectations for effect of the joint book reading
—A survey for parents of children who go to elementary schools—

猪原 敬介¹・上田 紋佳²・塩谷 京子³
Keisuke INOHARA・Ayaka UEDA・Kyoko SHIOYA

Abstract

Joint book reading has drawn a lot of attention from parents, teachers, and researchers in the field of education in recent years. However, basic data on joint book reading in Japanese families have hardly been reported. This study provided a survey of joint book reading between parents and their children in one private and two public elementary schools. We found that (a) most Japanese parents started joint book reading with their children when the children were one year old, (b) they stopped the activity when the children became six years old, (c) they expected various effects from joint book reading: emotional development, learning effects, and better communication with their children, and (d) the frequency of joint book reading tended to be high when the children had many books in their homes and the parents read many books themselves. The present paper discusses the educational implications of joint book reading in Japan.

序論

本論文は、「読み聞かせ」に関心のある研究者・教育者のための基礎的資料として、小学校3校の保護者を対象として行ったアンケートの結果について報告するものである。本論文における「読み聞かせ」とは、保護者が子どもに対して本(絵本など)を見せ、本の内容を中心としたコミュニケーションを取ることを指している。幼稚園などで行われる少数の教員が多数の児童へ一斉に本を読み聞かせる形態のものは、今回は対象としていない。

読み聞かせは、保護者と子どものふれあいや子どもが空想する機会の確保(秋田・無藤, 1996)、社会情緒的発達(e.g., Baker, 2013)、そして言葉の力の育成(e.g., Dunst, Simkus, & Hamby, 2012a, 2012b)において重要な活動であるとみなされており、これまで研究が行われてきた。しかしながら、読み聞かせという活動が、そもそも子どもが何歳ごろにどのくらい行われており、どのような意図を持って行っているのか、という実態調査は、秋田・無藤(1996)による幼稚園児の母親への調査を除き、わが国ではほぼ報告されていない。一人読み(子ども自身が一人で本を読むこと)については、全国図書館協議会が「不読率」という形で毎年、小学校、中学校、高校ごとに報告している(例えば、全国図書館協議会・毎日新聞社, 2017)。平山(2015)は大学生を、国立青少年教育振興機構(2013)では20歳以上の不読率も報告している。これらと比較すると、読み聞かせの調査データは少なく、本論文で公開することの意義は大きい。

本研究では、現在小学校に子どもを通わせている保護者に対して、「1歳0ヶ月～3歳0ヶ月の時期に、読み聞かせをどの程度していましたか」というような回想法を用いることで、読み聞かせを頻繁に行う時期について調査を行った。読み聞かせの頻度に影響を与えられようとする要因として、子どものための本の数と、保護者自身の読書時間についても調査を行った。また、「お子様と一緒に読

¹くらしき作陽大学 Kurashiki Sakuyo University ²ルーテル学院大学 Japan Lutheran College ³関西大学 Kansai University

書をすることに、どのような効果を期待していますか」という質問と「感情面を期待している（感情が豊かになる、空想したり夢が持てるようになる、など）」「学習面を期待している（文字の読み、語い力、文章理解力、思考力、集中力、一般常識が身につく、など）」「ふれあい面を期待している（親子のふれあいができる、子どもが喜ぶ、など）」「その他」という選択肢によって、読み聞かせを子どもに行う保護者のねらいについても検討した。

本研究の仮説

本研究では「出生～1歳0ヶ月」「1歳0ヶ月～3歳0ヶ月」「3歳0ヶ月～6歳0ヶ月」「6歳0ヶ月～現在」という時期のそれぞれについて読み聞かせ頻度を尋ねる。初語の出現により保護者の言葉への意識が高まり、読み聞かせが増加するのではないかと予測される。したがって、予測としては「1歳0ヶ月～3歳0ヶ月」が最も多いと考えられる。また、読み聞かせ頻度や、その開始時期には、保護者の教育への熱心さや、社会経済的地位が影響すると考えられる。今回の調査では、直接保護者の教育への熱心さや社会経済的地位を測定することはできなかったが、現在通う学校が私立（教育への熱心さが高く、社会経済的地位も高いことを想定）か公立（私立と比較した場合には、教育への熱心さが相対的に低く、社会経済的地位も低いことを想定）の違いはそのことを反映していると考えられる。本研究では、私立小学校1校と公立小学校2校が調査対象となっている。全体的傾向として、私立小学校に子どもを通わせる保護者のほうが、読み聞かせ開始時期が早く、頻度も高く、読み聞かせ効果への期待については「学習面を期待」の比率が高いのではないかと考えられる。

読み聞かせ頻度と他指標との関係としては、蔵書数が多いほど、また、保護者自身の読書時間も長いほど、読み聞かせ頻度が高くなると予測される。これは、蔵書数が多いほど子どもが本を目にする機会が多くなり、読み聞かせをねだる可能性が高くなるためである。また、蔵書数は教育への熱心さも反映しているため、教育に熱心な保護者ほど読み聞かせを多くするだろうということも予想できる。保護者の読書時間は、保護者自身の教育あるいは読書活動への価値づけの高さを反映するため、このことも読み聞かせ頻度増加の一因となり得る。類似した分析を秋田・無藤（1996）が行っており、「絵本量」と読み聞かせ頻度の相関係数が.33、「親の読書好意度・読書量」と読み聞かせ頻度の相関係数が.17となっており、本研究でも同程度の相関係数が得られることが予測される。ただし、秋田・無藤（1996）では所属機関（幼稚園）ごとの違いについての分析は行われていないので、本研究ではその点についても分析を行う。

また、子どもの性別によって、時期別の読み聞かせ頻度と読み聞かせへの期待は変化する可能性があるため、併せて分析する。

方法

参加者

関西地方の私立小学校（以下、私立A校）、中国地方の公立小学校（以下、公立B校）、関東地方の公立小学校（以下、公立C校）に子どもを通わせる保護者849名が調査に参加した。ただし、後述する質問紙への回答に1つでも欠損がある参加者は、分析から除外した。その結果、参加者は793名となった。

全体の約6.6%という多数の参加者が除外されているが、これはデータの解釈を容易にするための処理である。後述するように、本研究では子どもに対して行った読み聞かせについて、「出生～1歳0ヶ月」まではどの程度行ったか、「1歳0ヶ月～3歳0ヶ月」まではどのくらい行ったか、というように回想させている。時期ごとの読み聞かせ頻度について、純粹に時期による違いで比較ができるようにするためには、すべての時期で参加者（回答者）が同一であるほうが望ましい。そのため、上述の除外方法を採用した。

表1に、学校、学年、子どもの性別ごとに集計した保護者数を掲載した。私立A校では5年生まで、公立B校では6年生まで、公立C校では3年生までの子どもを持つ保護者が参加した。

表1 児童の学年と性別ごとの調査に参加した保護者の数

		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
私立小学校A	男	21	25	18	23	19		106
	女	26	28	25	21	23		123
公立小学校B	男	31	28	33	26	30	33	181
	女	23	28	33	38	33	34	189
公立小学校C	男	31	31	34				96
	女	28	27	43				98
合計		160	167	186	108	105	67	793

注 表中の性別は児童本人の性別を指す。

材料

本研究で用いた保護者へのアンケートを付録1に掲載した。アンケートは問1から問5の5問で構成されている。

問1では、回答対象の子どもが「出生～1歳0ヶ月」「1歳0ヶ月～3歳0ヶ月」「3歳0ヶ月～6歳0ヶ月」「6歳0ヶ月～現在」のそれぞれの時期に、どの程度読み聞かせを行ったかを1（全くしなかった）、2（あまりしなかった）、3（よくした）、4（非常によくした）の4件法で回答することを求めた。問2では、回答対象の子どものための蔵書数について1（0～10冊）、2（10～30冊）、3（30～60冊）、4（60冊以上）の4件法で回答することを求めた。問3では、保護者本人の読書時間について、1（30分未満）、2（30分以上1時間未満）、3（1時間以上2時間未満）、4（2時間以上）の4件法で回答することを求めた。問4では、読み聞かせの効果についての期待を、1（感情面を期待している（感情が豊かになる、空想したり夢が持てるようになる、など））、2（学習面を期待している（文字の読み、語い力、文章理解力、思考力、集中力、一般常識が身につく、など））、3（ふれあい面を期待している（親子のふれあいができる、子どもが喜ぶ、など））、4（その他）の4件法で回答することを求めた。問5では、回答対象の子どもについて、その学年と性別を尋ねた。

手続き

上記のアンケートを、協力校のクラス担任が児童へ配布し、児童が家庭に持ち帰り、保護者が記入後、児童がクラス担任に提出するという手順で実施した。調査は2012年10月～11月の間に実施された。

結果

時期別の読み聞かせ頻度（問1）

単純集計

表2に、3校をまとめた時期別の読み聞かせ頻度を示した。

「よくした」「非常によくした」の数値からも分かるように、1歳0ヶ月～3歳0ヶ月の時期に最も多く読み聞かせがなされており、ほぼ同じ頻度で3歳0ヶ月～6歳0ヶ月が続いている。3番目に多いのが出生～1歳0ヶ月で、「よくした」が39%、「非常によくした」が12%となっている。6歳0ヶ月以降は読み聞かせ頻度が激減し、出生～1歳0ヶ月よりも頻度が下がっている。

表2 時期別の読み聞かせ頻度設問への回答の割合

	全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計
出生～1歳0ヶ月	8% (66)	41% (326)	39% (307)	12% (94)	100% (793)
1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	1% (9)	25% (201)	50% (395)	24% (188)	100% (793)
3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	1% (7)	31% (245)	48% (382)	20% (159)	100% (793)
6歳0ヶ月～現在	9% (74)	60% (475)	25% (199)	6% (45)	100% (793)

注 括弧内の数値は度数

学校別集計

表3に、学校ごとの時期別読み聞かせ頻度を示した。

全体的な傾向は表2と変わらないが、1歳0ヶ月～6歳0ヶ月の時期における「非常によくした」の割合が私立A校で他の公立2校よりも高いことが顕著である。

表3 調査対象校ごとの時期別読み聞かせ頻度設問への回答割合

		全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計
私立小学校A	出生～1歳0ヶ月	4% (10)	33% (76)	48% (109)	15% (34)	100% (229)
	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	1% (2)	15% (34)	49% (112)	35% (81)	
	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	1% (3)	16% (37)	46% (106)	36% (83)	
	6歳0ヶ月～現在	12% (28)	55% (125)	22% (51)	11% (25)	
		全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計
公立小学校B	出生～1歳0ヶ月	8% (29)	47% (174)	36% (132)	9% (35)	100% (370)
	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	1% (4)	31% (116)	51% (188)	17% (62)	
	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	1% (3)	36% (132)	51% (190)	12% (45)	
	6歳0ヶ月～現在	8% (30)	60% (221)	28% (103)	4% (16)	
		全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計
公立小学校C	出生～1歳0ヶ月	14% (27)	39% (76)	34% (66)	13% (25)	100% (194)
	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	2% (3)	26% (51)	49% (95)	23% (45)	
	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	1% (1)	39% (76)	44% (86)	16% (31)	
	6歳0ヶ月～現在	8% (16)	66% (129)	23% (45)	2% (4)	

対象児童の性別ごとの集計

表4に、対象児童の学校・性別ごとの時期別読み聞かせ頻度を示した。学校ごとに男女の比率が異なるので、学校別に示している。

表4の通り、男女で明確な回答傾向の違いは見られなかった。

表4 学校と性別ごとの時期別読み聞かせ頻度設問への回答割合

		全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計	
私立小学校A	出生～1歳0ヶ月	男児に対して	8% (9)	35% (37)	43% (46)	13% (14)	100% (106)
		女児に対して	1% (1)	32% (39)	51% (63)	16% (20)	100% (123)
	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	男児に対して	1% (1)	19% (20)	48% (51)	32% (34)	100% (106)
		女児に対して	1% (1)	11% (14)	50% (61)	38% (47)	100% (123)
	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	男児に対して	1% (1)	17% (18)	42% (44)	41% (43)	100% (106)
		女児に対して	2% (2)	15% (19)	50% (62)	33% (40)	100% (123)
	6歳0ヶ月～現在	男児に対して	10% (11)	58% (61)	22% (23)	10% (11)	100% (106)
		女児に対して	14% (17)	52% (64)	23% (28)	11% (14)	100% (123)
		全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計	
公立小学校B	出生～1歳0ヶ月	男児に対して	9% (16)	46% (83)	36% (65)	9% (17)	100% (181)
		女児に対して	7% (13)	48% (91)	35% (67)	10% (18)	100% (189)
	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	男児に対して	1% (1)	35% (63)	48% (87)	17% (30)	100% (181)
		女児に対して	2% (3)	28% (53)	53% (101)	17% (32)	100% (189)
	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	男児に対して	1% (2)	35% (63)	54% (97)	10% (19)	100% (181)
		女児に対して	1% (1)	37% (69)	49% (93)	14% (26)	100% (189)
	6歳0ヶ月～現在	男児に対して	7% (13)	63% (114)	27% (48)	3% (6)	100% (181)
		女児に対して	9% (17)	57% (107)	29% (55)	5% (10)	100% (189)
		全くしなかった	あまりしなかった	よくした	非常によくした	合計	
公立小学校C	出生～1歳0ヶ月	男児に対して	17% (16)	44% (42)	29% (28)	10% (10)	100% (96)
		女児に対して	11% (11)	35% (34)	39% (38)	15% (15)	100% (98)
	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	男児に対して	3% (3)	27% (26)	50% (48)	20% (19)	100% (96)
		女児に対して	0% (0)	26% (25)	48% (47)	27% (26)	100% (98)
	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	男児に対して	1% (1)	40% (38)	45% (43)	15% (14)	100% (96)
		女児に対して	0% (0)	39% (38)	44% (43)	17% (17)	100% (98)
	6歳0ヶ月～現在	男児に対して	10% (10)	67% (64)	21% (20)	2% (2)	100% (96)
		女児に対して	6% (6)	66% (65)	26% (25)	2% (2)	100% (98)

子どものための蔵書数（問2）

単純集計

表5に、3校をまとめた子どものための蔵書数を示した。子どものための本が0～10冊という家庭は少なく、10冊以上はある家庭が多かった。

表5 子どものための本の冊数についての回答割合

0～10冊	10～30冊	30～60冊	60冊以上	合計
9% (74)	33% (258)	32% (251)	26% (210)	100% (793)

学校別集計

表6に、学校ごとの子どものための蔵書数を示した。

私立A校は「60冊以上」の回答割合が半数を超えるなど、明らかに他の公立2校よりも子どものための蔵書数が多かった。公立2校では、「10～30冊」の回答割合が約4割と多かった。

表6 学校ごとの子どものための本の冊数についての回答割合

	0～10冊	10～30冊	30～60冊	60冊以上	合計
私立小学校A	1% (3)	15% (34)	33% (75)	51% (117)	100% (229)
公立小学校B	14% (51)	40% (148)	32% (119)	14% (52)	100% (370)
公立小学校C	10% (20)	39% (76)	29% (57)	21% (41)	100% (194)

保護者自身の読書時間（問3）

単純集計

表7に、3校をまとめた保護者自身の読書時間を示した。

「30分未満」が6割であり、最多となっている。

表7 保護者自身の読書時間についての回答割合

30分未満	30分～1時間	1～2時間	2時間以上	合計
60% (476)	26% (208)	10% (83)	3% (26)	100% (793)

学校別集計

表8に、学校ごとの保護者自身の読書時間を示した。

「30分未満」が最多であることはどの学校でも同様だが、私立A校では「30分～1時間」の回答も35%あった。公立C校では「30分未満」が7割を超えていた。

表8 学校ごとの保護者自身の読書時間についての回答割合

	30分未満	30分～1時間	1～2時間	2時間以上	合計
私立小学校A	43% (99)	35% (80)	16% (36)	6% (14)	100% (229)
公立小学校B	64% (235)	26% (96)	9% (32)	2% (7)	100% (370)
公立小学校C	73% (142)	16% (32)	8% (15)	3% (5)	100% (194)

読み聞かせの効果についての期待（問4）

単純集計

表9に、3校をまとめた読み聞かせの効果への期待についての回答割合を示した。

「感情面を期待」「学習面を期待」「ふれあい面を期待」の3つが31～35%の間に収まるなど、ほぼ同様の値であったことが分かる。これら以外の回答である「その他」には「特に何も期待していない」などの回答があったが、割合としては2%と少ないものであった。

表9 子どもと一緒に読書をする事への期待についての回答割合

感情面を期待	学習面を期待	ふれあい面を期待	その他	合計
35%	31%	32%	2%	100%
(280)	(244)	(256)	(13)	(793)

学校別集計

表10に、学校ごとの読み聞かせの効果への期待についての回答割合を示した。

学校ごとに回答傾向が異なった。私立A校では「感情面を期待」の割合が多く、ふれあいの割合は少なかった。公立B校では「ふれあい面を期待」が多いが、同じ公立のC校では「感情面を期待」の割合が多かった。

表10 学校ごとの子どもと一緒に読書をする事への期待についての回答割合

	感情面を期待	学習面を期待	ふれあい面を期待	その他	合計
私立小学校A	43% (98)	34% (77)	22% (51)	1% (3)	100% (229)
公立小学校B	29% (109)	29% (109)	39% (146)	2% (6)	100% (370)
公立小学校C	38% (73)	30% (58)	30% (59)	2% (4)	100% (194)

対象児童の性別ごとの集計

表11に、学校と対象児童の性別ごとの読み聞かせの効果への期待についての回答割合を示した。

表11の通り、男女で一貫した回答傾向は見られなかった。

表11 学校と性別ごとの子どもと一緒に読書をする事への期待についての回答割合

		感情面を期待	学習面を期待	ふれあい面を期待	その他	合計
私立小学校A	男児に対して	43% (44)	37% (38)	20% (21)	3% (3)	100% (103)
	女児に対して	44% (54)	32% (39)	24% (30)	0% (0)	100% (123)
公立小学校B	男児に対して	34% (60)	25% (45)	41% (74)	1% (2)	100% (179)
	女児に対して	26% (49)	35% (64)	39% (72)	2% (4)	100% (185)
公立小学校C	男児に対して	33% (31)	39% (36)	28% (26)	3% (3)	100% (93)
	女児に対して	43% (42)	23% (22)	34% (33)	1% (1)	100% (97)

時期別読み聞かせ頻度、子どものための蔵書数、保護者自身の読書時間の相関関係

アンケートにおける選択肢の番号をそのまま得点として、時期別の読み聞かせ頻度（4変数）と「子どものための蔵書数」「保護者自身の読書時間」の2変数について、および、「子どものための蔵書数」と「保護者自身の読書時間」の2変数間について学校別にスピアマンの順位相関係数を算出した（表12）。その結果、順位相関係数はすべて正の値であった。

子どものための蔵書数と読み聞かせ頻度の関係については、3つの小学校すべてで、子どものための蔵書数と4つの時期の読み聞かせ頻度が有意であった。公立B校における子どものための蔵書数と6歳0ヶ月～現在の時期の読み聞かせ頻度の順位相関係数（.22）を除けば、子どものための蔵書数と読み聞かせ頻度の相関係数の値は、公立2校において私立A校よりも高かった。

保護者自身の読書時間と読み聞かせ頻度の関係について、学校間で違いが見られた。すなわち、公立B校においては順位相関係数がすべて有意であり、公立C校においては1歳0ヶ月～3歳0ヶ月の時期以外は有意であったが、私立A校においては3歳0ヶ月～6歳0ヶ月の時期の読み聞かせ頻度のみが有意であった。

子どものための蔵書数と保護者自身の読書時間の関係については、すべての順位相関係数が正の値であり、私立A校と公立B校は有意であった。

表12 学校別の順位相関係数

		読み聞かせ頻度				子どものための蔵書数
		出生～1歳0ヶ月	1歳0ヶ月～3歳0ヶ月	3歳0ヶ月～6歳0ヶ月	6歳0ヶ月～現在	
私立A校	子どものための蔵書数	.19**	.30**	.29**	.25**	
	保護者自身の読書時間	.05	.04	.13*	.08	.20**
公立B校	子どものための蔵書数	.34**	.40**	.38**	.22**	
	保護者自身の読書時間	.19**	.23**	.23**	.25**	.26**
公立C校	子どものための蔵書数	.26**	.37**	.40**	.33**	
	保護者自身の読書時間	.15*	.13	.15*	.30**	.12

注 ** p<.01 * p<.05

考察

読み聞かせの多い時期と、学校・子どもの性別による影響について

本研究で対象とした3校において、最も頻繁に読み聞かせが行われた時期は子どもが1歳0ヶ月から6歳0ヶ月の間であった。また、出生から1歳0ヶ月の時期には「あまりしなかった」と「よくした」の割合がほぼつりあうようになっており（例えば、単純集計である表2では、「あまりしなかった」が41%、「よくした」が39%となっている）、1歳以前の早期から読み聞かせを開始する保護者も多いことがうかがえる。一方、6歳0ヶ月以後の時期には「あまりしなかった」の割合が急増している。これらの結果をまとめると、全体的傾向として「読み聞かせの開始時期は1歳になる少し前の時期が多く、その後6歳0ヶ月頃までは読み聞かせの頻度が最も高くなる時期であり、6歳前後に読み聞かせを終了する保護者が多い」のではないかと考えられる。

以上の全体傾向は、「学校」要因によってやや変わってくる。私立A校と公立2校を比較すると、私立A校のほうが1歳以前の読み聞かせ頻度が高く、1歳0ヶ月から6歳0ヶ月の時期の「非常によくした」の割合が高い。私立A校と公立2校のこうした差がどこから生じるかについては、いくつかの可能性が考えられる。例えば、子どもための蔵書数や保護者自身の読書時間の結果についても私立A校が公立2校よりも高かったことから、社会経済的地位と保護者の教育に対する熱心さが、平均的には私立A校のほうが公立2校よりも高かった可能性が考えられる。一方、子どもの性別は上記の全体傾向にはほぼ変化を与えないということが分かった。

今後の展望として、読み聞かせの開始時期と終了時期をより正確に調査することが挙げられる。現在「出生～1歳0ヶ月」「3歳0ヶ月～6歳0ヶ月」「6歳0ヶ月～現在」となっている時期を、より細かく設定した質問紙を作成することで、読み聞かせの開始時期と終了時期の家庭間のばらつきについてより詳細に知ることができ、そのばらつきを生じさせる要因は何か、反対に、そのばらつきが言語力などに及ぼす影響はどういったものがあるか、といった問題について検討していくことができると考えられる。

子どもと一緒に読書をする事への期待と学校・性別による影響について

次に、子どもと一緒に読書をする事への期待について考察する。

まず学校と性別をまとめた単純集計である表9を見てみると、感情、学習、ふれあいがほぼ均等になっており、子どもと一緒に読書することの効果について、多様な期待があることが分かる。

学校ごとに回答傾向が異なった。私立A校では「感情面を期待」の割合が多く、ふれあいの割合は少なかった。公立B校では「ふれあい面を期待」が多いが、同じ公立のC校では「感情面を期待」の割合が多かった。この傾向には、学校の違いのみならず、地域性（私立A校は関西地方、公立B校は中国地方、公立C校は関東地方である）の違いも含まれると考えられる。また、子どもの性別による違いはほぼ見られなかった（表11）。

事前の予測では、私立A校では「学習面を期待」の比率が高いのではないかと予測していたが、それよりも「感情面を期待」の割合が多かった。学習面については読み聞かせ以外の働きかけがすでになされており、読み聞かせに学習効果を求める必要がないということなのかもしれない。今回得られ

た結果の原因について、今後より詳細に調査を行う必要がある。

読み聞かせ頻度と関連する指標について

子どものための蔵書数と読み聞かせ頻度には正の相関関係が見られた。学校間でもそれほど大きな差が見られないことから、保護者による読み聞かせを促進するためには、子どものための蔵書数を増やす働きかけが有効である可能性が示唆された。しかしながら、「子どものための蔵書数が多い保護者は教育熱心であり、教育熱心であるから読み聞かせ頻度が高い」というような第3の変数による擬似相関である可能性もある。教育への熱心さが同程度でも、家に蔵書が多ければ読み聞かせが促進されるという知見を今後は示していく必要があるだろう。

次に、保護者自身の読書時間との関連である。公立2校では弱いながら有意な正の相関関係が見られる傾向があり、私立A校では相関関係が有意にならない傾向がある。この原因にも様々なものが考えられる。1つには、公立2校における有意な正の相関も上述の擬似相関であり、私立小学校で正の相関が有意にならないのは、私立小学校に児童を通わせるという時点で、どの保護者も教育熱心であり、教育熱心さの個人差が反映されてこないからであるという可能性もある。今後、保護者に「学生時代の読書量」などを尋ねることで、現在の子育ての熱心さと、保護者本人の読書への積極性を分離して分析することが可能になると思われる。

以上の相関係数の値(表12)は、先行研究である秋田・無藤(1996)の結果(「絵本量」と読み聞かせ頻度の相関係数が.33、「親の読書好意度・読書量」と読み聞かせ頻度の相関係数が.17)と同程度のものであった。秋田・無藤(1996)では所属機関(幼稚園)間での違いについて分析がされていなかったが、特に保護者自身の読書時間について、学校によって相関関係が異なるという新たな知見を報告した。

まとめ

本論文では、これまで報告の少なかった日本の家庭における読み聞かせの実態について、私立1校、公立2校の小学校で保護者を対象とした調査を行った。その結果、(a)多くの親が子どもの1歳前後から読み聞かせを開始し、(b)6歳になる頃には終了している、(c)読み聞かせの効果への期待については「感情面の育成」「学習面の効果」「子どもとのふれあい」など、様々なものがあり、(d)全体的には、家庭に子どものための蔵書が多く、保護者自身の読書時間が長い場合に、子どもへの読み聞かせ頻度も高い、という結果が得られた。

引用文献

- 秋田喜代美 & 無藤隆. (1996). 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. *教育心理学研究*, 44 (1), 109-120.
- Baker, C. E. (2013). Fathers' and Mothers' Home Literacy Involvement and Children's Cognitive and Social Emotional Development: Implications for Family Literacy Programs. *Applied Developmental Science*, 17 (4), 184-197.
- Dunst, C. J., Simkus, A., & Hamby, D. W. (2012a). Effects of reading to infants and toddlers on their early language development. *Center for Early Literacy Learning*, 5 (4), 1-7.
- Dunst, C. J., Simkus, A., & Hamby, D. W. (2012b). Relationship Between Age of Onset and Frequency of Reading and Infants' and Toddlers' Early Language and Literacy Development. *Center for Early Literacy Learning*, 5 (3), 1-10.
- 平山祐一郎. (2015). 大学生の読書の変化—2006年調査と2012年調査の比較より—. *読書科学*, 56 (2), 55-64.
- 国立青少年教育振興機構. (2013). 子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究 【成人調査ワーキンググループ】報告書. from http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/80/ (2017)

年9月20日)

全国図書館協議会・毎日新聞社。(2017).「第62回読書調査」の結果. from <http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html> (2017年9月20日)

謝辞

本研究にご協力いただきました保護者の方々、生徒の皆さん、先生方に深く感謝いたします。また、本研究は「公益財団法人博報児童教育振興会」による第7回「児童教育実践についての研究助成事業」による援助を受けました。

付録

付録1 本研究で用いた保護者に対するアンケート

読書に関するアンケート調査												
*本調査は無記名式です。アンケート結果は保護者と児童の皆さまと対応付けられることはありません。												
問1 以下のそれぞれの時期に、 ご自宅でのお子様への本または絵本の読み聞かせ を、回答者様含め、ご家族全体で、どの程度していましたか。それぞれの時期について、最もよく当てはまる数字に <u>一つ〇</u> をつけてください。												
出生	～ 1歳0ヶ月	全くしなかった	1	・・・	あまりしなかった	2	・・・	よくした	3	・・・	非常によくした	4
1歳0ヶ月	～ 3歳0ヶ月	全くしなかった	1	・・・	あまりしなかった	2	・・・	よくした	3	・・・	非常によくした	4
3歳0ヶ月	～ 6歳0ヶ月	全くしなかった	1	・・・	あまりしなかった	2	・・・	よくした	3	・・・	非常によくした	4
6歳0ヶ月	～ 現在	全くしなかった	1	・・・	あまりしなかった	2	・・・	よくした	3	・・・	非常によくした	4
問2 お子様を読むための本または絵本は、何冊ぐらいご家庭にありますか。最もよく当てはまる数字に <u>一つ〇</u> をつけてください。過去にお兄様・お姉様のために買われた本であっても、現在、お子様のものであれば、それも含めてください。												
1. 0～10冊 2. 10～30冊 3. 30～60冊 4. 60冊以上												
問3 回答者様ご本人は 、お子様への本または絵本の読み聞かせの時間を除いて、家や図書館で、1週間、1日あたりどれくらいの時間、読書を読みますか(漫画、雑誌、新聞は除きます。)。最もよく当てはまる数字に <u>一つ〇</u> をつけてください。												
1. 30分未満 2. 30分以上 1時間未満 3. 1時間以上 2時間未満 4. 2時間以上												
問4 お子様と一緒に読書をするごとに、どのような効果を期待していますか。最もよく当てはまる数字に <u>一つだけ〇</u> をつけてください。												
1. 感情面を期待している(感情が豊かになる、空想したり夢が持てるようになる、など)												
2. 学習面を期待している(文字の読み、語い力、文章理解力、思考力、集中力、一般常識が身につく、など)												
3. ふれあい面を期待している(親子のふれあいができる、子供が喜ぶ、など)												
4. その他(具体的には: _____)												
問5 このアンケートをお持ち帰り頂いたお子様 について、おたずねします。さしつかえない範囲でお答えください。												
学年: ()年												
性別: 1. 男 2. 女 (どちらかの数字に〇をつけてください。)												
ご協力ありがとうございました。												
この用紙は本アンケート用紙と一緒に配布された封筒に入れて、担任の先生に提出してください。ご協力よろしく願っています。												

